

---

# 願い事は一つだけ。

はなちょこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

願い事は一つだけ。

### 【Zコード】

Z0740M

### 【作者名】

はなちょ

### 【あらすじ】

主人公の圭太には大好きな彼女、舞がいる。  
しかし彼女は病にかかり、残された命はあとわずか。  
それを知った圭太は舞を救うべく、ある島へと訪れる。

見慣れた町並みを自転車で走る。

自転車の力ゴには、ピンクのバラとかすみ草の花束。決して豪華ではないが、それでも舞はいつも喜んでくれる。

建物の中はいつものようにざわざわしている。

階段を上がり、廊下を少し歩くと大きな扉がある。そこを開けると、見慣れた光景が広がる。

パタパタと足音を立てて看護士さんが慌しそうに俺の横を通り過ぎて行つた。

一瞬、ドキッとした。

俺はさつきの看護士さんを目で追つた。

看護士さんは出入り口のすぐ隣の病室に入つて行つた。俺はホッとしてまた歩き出した。

コソコソ。

ドアを軽くノックする。

「はい。どうぞ」

聞き慣れた声が聞こえた。

俺はドアを開けてニッコリ笑つた。

「圭ちゃん！」

舞は俺の顔を見ると嬉しそうに笑つた。

真っ白なベッドの上に座る舞はいつもと変わらない。でも。

前より痩せたし、顔色もあまり良くない。

「はい」

俺は花束を舞に見せた。

「わあ！ 紹麗！ いつもありがとうね」

舞はキラキラした目で俺が持っている花束を見た。

「花瓶に入れておくよ」

俺はそう言ってベッドの横のテーブルの上に置いてある花瓶を手に取つて、病室の隅にある水道で花瓶の中に水を入れた。「いつも圭ちゃんが花を持ってくれるから、お母さん達は花を持つてこないの。圭太君が可愛い花を持ってくれるから助かる、って言つてた」

舞が流れる水に負けないように少し大きな声でそう言つた。

「そうか。それじゃあもつと豪華なのを持つて来ないとな」

俺はそう言つて笑いながら蛇口をキュッとしめた。

「いいよ。十分豪華よ」

舞はそう言つて俺にニッコリ笑つた。

「誕生日にはもつと豪華なのやるよ」

「誕生日・・・・・」

舞がそこまで言つと下を向いた。

そして俺の顔を見てこう言つた。

「半年後の私の誕生日までには退院したいな」

舞はそう言つて少しだけ微笑んだ。

「その頃には退院してるよ」

俺はそう言つと花を入れた花瓶をベッドの横のテーブルに置いた。

「圭ちゃんは嘘つく時、私の顔を見ないよね・・・・・・

「・・・・・え？」

俺は驚いて舞を見た。

舞はニッコリ笑つてこう言つた。

「冗談。今日は何時までいるの？」

「あ、ああ。今日はちょっと用事があるんだ」

「もう行くの？」

「うん。じめんな。ゆっくりできなくて」

俺はそう言つとアの方へゆっくり歩いた。

「いいの。浮氣しちゃダメだよ」

「舞だけで手一杯だよ」

「ふふ。花いつもありがとね」

舞が笑顔でそう言った。

俺は舞にニーッコリ笑つて病室を出た。

病棟を出た所で俺は壁にもたれて、ため息をついた。

舞は重い病気にかかっていて一ヶ月前から入院している。昨日、舞のお母さんと病室の廊下で会った。

その時、舞のお母さんはこう言った。

「舞は…………もう長くは生きられないだらつて…………」

俺は田の前が真っ暗になつた。

信じられなかつた。

嘘だと思った。

嘘であつてほしい。

だけど。

どんどん瘦せていく舞。

顔色が悪い舞。

一日中ベッドから起きられない日もある。

そんな現実が、俺の「嘘だ」という気持ちを打ち消した。でも。

舞を死なせない。

昨日、一晩中考えたんだ。

舞を助ける方法は一つだけ。

あそこに行けば舞を助けてもらえるかもしれない。

俺はポケットから財布を取り出した。

財布のお札を数えて財布をしました。

「よし」

俺はそう言つと急いで病院を出て自転車をこいで駅へ向かつた。  
電車に乘ると窓の外をぼんやりと見つめていた。

舞とは幼なじみだ。

家が隣同士で小さな頃から一緒に遊んだ。

俺は小さな頃から舞のことが好きだった。

真つ黒な長い黒髪。真つ白な肌。笑うと太陽みたいで。

俺の胸をいつもドキドキさせた。

あれは中学一年のバレンタインの時だった。

「圭ちゃん、このチョコ本命だからね！」

そう言つて舞が綺麗にラッピングされたチョコを俺に渡してきた。

「…………え？！」

驚く俺に舞は頬を赤く染めて俺の顔を見ていた。

「ホワイトデーはペアリングだな」

俺がそう言つと舞はニッコリ笑つた。

俺が大好きな舞の笑顔。

その日から俺と舞は付き合つことになつた。  
なかなか手もつなげないような俺達だけど。  
それでも舞と一緒にいる時間は幸せだった。  
ホワイトデーにはペアリングを買つて

一つを舞に渡した。

真ん中に星のような形の小さな青い石がはめこんであるシルバーリング。

今も俺と舞の右手の薬指に光つてゐる。

「あれから三年か…………」

俺はそう呟いて右手の薬指の指輪を見た。

青い石が太陽の光に当たつてキラリと光つた。

舞と一緒に受験勉強をした。

同じ高校に入れた時は飛び上がって喜んだ。

同じクラスになれた時、俺は舞に思わずこう言った。

「俺達って運命なんだって」

舞はクスクス笑つてた。

でも、その後、舞は大きく頷いた。

学校へ行く時もお昼を食べる時も帰る時もいつも一緒に  
ケンカも何度かしたけど

その度にお互いの絆が深まつていく気がした。

俺達はずっとずっと一緒にいられるんだと思つてた。

そう信じてた。

でも。

舞は高校一年になつてすぐに体調を悪くして  
学校を休むことが多くなつた。

そして。

夏休みに入る前に入院になつた。

俺は毎日欠かさずにお見舞いに行つた。

舞は毎日俺を見ると笑顔を見せた。

俺の大好きな笑顔。

「誰が舞を連れて行つていいって言つたんだよ」

俺は空を見上げてそう呟いた。

拳をギュッと握つた。

一時間ほど電車に乗るとバスに乗り換える。

バスで三〇分ほど行つたところにフェリー乗り場がある。

俺はそこでバスを降りた。

フェリーに乗ると空いてる席に座る。

この時間は客があまりいなかつた。

フェリーがゆっくりと動き出した。

海の上をフェリーが走る。

しばらくするとフェリーの窓の外から島が見えてきた。

俺の母が育つた島。

毎年、夏休みにはこの島の母方の祖父母の家に両親と俺で遊びに行くのだが今年は俺は行かなかつた。

舞の側にいたかったから。

だから一年ぶりに見る景色だつた。

三〇分ほどしてフェリーが止まる。

フェリーを降りて島に一步、足を踏み入れる。目の前にはお土産屋や民宿が並んでいる。少し遠くに小さな山が見えた。もう何度も見ている景色だ。

「行くか」

俺はそう言つて歩き出した。

喉が渴いたので自動販売機でジュースを買った。コーラのボタンを押そうとしたがピーチジュースのボタンを押した。

ガコン。

その音を聞くと取り出し口からピーチジュースを取り出した。一気に飲み干す。

舞の嬉しそうな顔が頭に浮かぶ。

「私、ピーチジュース大好き」

そう言つて美味しそうにジュースを飲む舞の顔。

いつも舞はピーチジュースを買ってたな。

今もお見舞いに持つ行つてる。

舞は俺の持つていつたピーチジュースをいつも嬉しそうに飲むんだ。

「舞は・・・・もつ長くは生きられないだりつて・・・・」

「

泣きそうな声で俺にそう言つた舞のお母さんの言葉を思い出した。

その声が耳の奥で何度も繰り返される。

俺は頭を大きく左右に振つた。

拳をギュッと握り唇を噛み締める。

「舞は俺が助ける」

俺はそう言つて走り出した。

あの森へ向かつて。

あの時のことは今でもハツキリと覚えていた。

一〇歳の時に夏休みにこの島に来た時だつた。

山の手前にある森に入つたら道に迷つてしまつた。

しばらく歩いていると目の前に洞窟のような物が見えた。

洞窟の中から小さな光が見えた。

俺はまるで吸い込まれていくかのよう洞窟の中に入つた。

真つ暗な洞窟の中を遠くに見える光を頼りに歩いた。

洞窟を抜けると。

目の前に広がつていたのは。

森の光景だつたけど、俺がさつきまでいた森とは違つていた。

沢山の木はどれも大きくて太くて空まで届きそなぐらい長く伸びている。

森全体が不思議な光を放つていた。

そして。

木の枝や根元、地面の上や空中に

キラキラと光つている小さな生き物が見えた。

俺は目をこすつた。

見間違ひじやない。

その生き物は人間のような姿をしていた。

「うわあ！」

俺が驚いて声を上げるとその生き物達が一斉に俺を見た。

俺は後ずさりをした。

体が震えた。

その生き物の中の一匹・・・・・・というか一人なのか。

俺の顔の近くまで飛んできた。

人間の女の子のような姿のしているが  
ふわふわしたウェーブのかかった髪は緑色で  
白いワンピースのような服。

背中に七色の羽がついてる。

そしてその体は当時一〇歳だった俺の手より小さい。

「あなた私達が見えるのね？」

その生き物の言葉に頷いた。

「へえ。 そうなの」

俺は震える声で聞いてみた。

「ここは・・・・どこ？ あなたはだれ？」

生き物は腰に手を当ててこう言った。

「ここは妖精の森。 私達は妖精なの。 私の名前はクレア。 あなたの名前は？」

「・・・・・圭太・・・・・」

「圭太ね。 もしかして道に迷つたの？」

妖精、 クレアの言葉に俺は頷いた。

「そう。 ジャあ家に帰してあげるわ」

クレアがそう言うと後ろから別の妖精の声がした。

「クレアは本当、 若い人間の男の子が好きよね」「うるさいわねー。 そんなんじゃないわよ」

クレアが後ろで笑う妖精に向かつてそう言つと。  
小さな小さなステッキを振り回した。

辺りが光に包まれて俺は眩しくて目を閉じた。

「着いたわよ」

クレアの声に目を開けると目の前は祖父母の家だった。

「あ、 ありがとう・・・・・・」

僕がそう言うとクレアはニッコリ笑つた。

「またゆっくり遊びに来なさいよ。人間の話も聞きたいわ」  
クレアはそれだけ言つとパツと消えた。  
クレアが消えた後にはキラキラした光だけが残つていた。

次の日。

俺は「そんなの夢だ」という父と母を連れてあの森へ行つた。  
どうにかして洞窟を見つけたが、その洞窟の奥は光つていなかつた。

洞窟を抜けると、そこは見覚えのある森。

昨日の妖精の森ではなかつた。

「やつぱり夢だつたんだよ」

両親にそう言われ家に戻つた。

あれから何度もあの森へ行つて洞窟を抜けたけど。

妖精の森には行けなかつた。

毎年、思いついたように行つてみたが。

俺が再び妖精の森を見ることはなかつた。

あれは幻だつたんだ。

俺もそつ思つようになつた。

「ねえ。圭ちゃん。見てみて。妖精つて可愛いのね」

ちょうど三日前。

舞がベッドの上で本を開きながらそつ言つた。

それは妖精の本だつた。

「妖精？」

俺はその本を覗き込んだ。

そこには俺があの時、あの森で見た妖精とそつくりの絵が描かれていた。

「妖精は森にいることが多いです。

その姿を見ることは誰にでもできるわけではありません」

舞が本に書かれた文字を読み上げる。

俺は言った。

「まだそんな子供の読む本、読んでんのか」  
「いいじゃない子供の読む本でも」  
舞はそう言いつとせらじてこう続けた。

「妖精はいるのよ。私は信じてる」

そう言つて窓の外を見た。

だから俺は決心したんだ。

昨日、舞がもう長くないということを聞いて  
決心は固まつた。

今まで貯めていたバイト代を少しだけ銀行から下ろしてきて  
この島に行くことにした。

妖精の森へ行くために。

クレアに会いに行くために。

残された望みはただ一つ。

クレアに舞の病気を治してもらつんだ。

できないかもしれないし

あれはやっぱり幻だったのかもしれない。

でも。

可能性が1%でもあるならそれに賭けよつと思つた。

「あつた・・・・・・」

森を歩いてあの洞窟を見つけた。

洞窟の奥には小さな光が見える。

あの時と、妖精の森を見たときと同じだ。

俺はドキドキする胸をおさえて洞窟に入った。  
奥の光を頼りに洞窟の中を進んで行く。

洞窟を出ると。

「やつた！」

俺はそう言つてガツツポーズをした。

俺の目の前に広がっているのは。  
あの時に見た風景と同じ。

妖精の森だつた。

妖精がみんな俺の方を見ている。

一人の妖精が俺の方へ飛んできた。

「圭太じゃない！」

そう言つて俺の顔の目の前で止まつたのは。

「クレアア！」

そう。

あの時、俺を助けてくれた妖精、クレアだつた。

「大きくなつたわね。でも面影があるわ」

「クレアは変わらないな」

「相変わらず可愛いことね」

「ま、そういうことで」

クレアと歩きながら会話していると。

クレアは一本の木の前で止まつた。

その木も太くて大きくて空まで届きそうなほど高い。

クレアは「ちょっと待つて」と言つて木の下にある小さなドアに入つて行つて少しすると出てきた。

「ハーブティーでもどう?」

クレアがそう言つて小さな小さなティーカップを二つ持つて俺の前に座る。

クレアが一つのティーカップに人差し指をちゃんと当てる

ティーカップは一瞬で大きくなつて俺にちょうどいいサイズになつた。

「圭太は家には入れないわね。外で悪いけど座つて

俺は言われるがままにその場に座つた。

クレアは空中にふわふわと浮かびながら座つた。

ちょうど俺の顔の前だ。

「いただきます」

俺はそう言つてハーブティーを飲んだ。  
少し気持ちが落ち着いた。

「で。何かあつたの？また道にでも迷つた？」  
クレアがそう言つと俺は首を横に振つた。

それまで笑つていたクレアの顔が真剣な顔になつた。

「なに？どうかしたの？」

「あれから何度もここに来ようとしたけど来られなかつた」「そりやあ人間がほいほい来られる場所じゃないもの」  
クレアはそう言つとハーブティーを一口飲んだ。  
そして続ける。

「子供の頃はたまーに見える子がいてね。

それでも何か困つたことや助けてほしいことがないと、ここには来られないの」

「そうだつたんだ」

「もう圭太も17歳よね？その年齢になつてもここに来られるなんて、すごく困つている事でもないと……」「

「そなんだ」

俺がそう言つとクレアは俺の顔を見た。

「妖精は人間の願いを叶えられるのか？」

「ええ・・・・・。その妖精に叶える氣があるのなら」  
俺は小さく深呼吸してからこう言つた。

「ある人の命を救つてほしい」

クレアが目を真ん丸くしてこう聞いた。

「ある人？」

「俺の彼女。重い病気なんだ。もう長くは生きられないって言われた」

クレアは俺のその言葉を聞いた瞬間。

慌ててドアを開けて家に入つてしまつた。

俺は驚いて小さな小さなドアをノックした。

「クレア？ どうかしたのか？！」

ドアの向こうから泣いている声が聞こえた。

「仕方ないわよ。クレア、あなたのことずっと待つてたのよ」

その声に後ろを振り向くと黄色の髪をツインテールにした妖精が立っていた。

俺は驚いて聞き返した。

「待つてた？」

「クレア、あなたに恋をしたのよ。まあ、一目惚れだったみたいだけど。

でもずっと待つてたのよ。あなたがここに来るのを

「・・・・・ そんな」

俺はそう言って下を向いた。

そしてその妖精にこう言った。

「お願いです。僕の彼女を助けてください！」

「ごめんね。クレアがあんなにあなたを待つていたことを知つてて、その願いは叶えられないわ」

「でも人の命なんです！」

「人の命ね・・・・・ そう言われても正直、人間は人間。妖精とは違う生き物よ」

その妖精はそれだけ言つとふわりと飛んでどこかへ飛んでいってしまった。

しばらくクレアの家の前にいたが、  
クレアが出てくる様子はなかつた。

何度も声をかけたが返事はない。

「クレア。お願いだ。もう望みを叶えられるのは君だけなんだ」

「嫌よ！ ずっとずっとあなたを待つてたのよ！ それなのに・・・。あなたの彼女を助けたくない！」

「でも！」

「帰つて！ 今すぐここから出て行つて！」

クレアはドアの向こうでそう叫んだ。

俺は仕方なく立ち上がり、妖精の森を出ようとしました。

洞窟の前で立ち止まる。

クレアが家から出でてくる気配はない。

俺は重い足取りで洞窟を抜けて妖精の森を出た。  
とぼとぼと歩きながら海へと歩いた。

辺りは暗くなつてきていった。

海へ行くと砂浜に腰を下ろした。

「ダメか・・・・。最後の望みだつたんだけどな・・・・」

俺はそう呟いて近くにあつた石を海に投げた。

ポチヤンと小さな音をたてて石は海へと消えた。

波は静かで砂浜にも誰もいない。

辺りは驚くほど静かだ。

「舞・・・・・」

俺はそう呟いた。

舞の笑顔が瞼に焼き付いている。

ホワイトデーにペアリングをあげた時。

舞は本当に喜んでくれた。

右手の薬指に俺がはめてあげると。

喜んでその右手を俺に見せた。

初めて恋人同士として手をつないだあの時。

小さな細い手はとても温かかった。

お互い照れながら歩いた。

舞と一緒に受験勉強だつて楽しくて。

一気に成績が上がった。

先生も両親も驚いていた。

舞も嬉しそうに笑つた。

同じ高校に受かつて同じクラスになつて。

授業中、舞の後姿をいつも見ていた。

まるで片思いのように。

舞が俺の方を見てニシコリ微笑む度に。

俺の心臓はドキドキと鳴った。

舞の作ってくれた弁当と一緒に食べる。

今まで食べた何よりもウマインだ。

見慣れた帰り道も舞と歩くとキラキラ輝いて見えた。

舞が隣にいることがすごく幸せに思えるんだ。

映画を観ていても。

遊園地に行つても。

街へ買い物へ行つても。

舞の笑顔を見られるのはものすごく嬉しい。

舞が隣にいるからとびきり幸せだ。

何よりも大事なんだ。

舞のためなら俺の命なんてくれてやる。

舞は俺にとつて、かけがえのない存在なんだ。

舞がいなくなつたら俺は生きていけない。

舞のいないこの世界なんて生きる意味がない。

「舞がいなくなつたら俺も後を追うよ……」

俺はそう呟いて海を見つめた。

「なにバカなこと言つてるのよー」

後ろで声が聞こえた。

驚いて振り向くと。

「クレア！」

俺の目の前をクレアがふわふわと浮かんでいた。

「圭太の彼女を助けることは圭太を助けることにもなるのよね

クレアはそう言つて俺に微笑んだ。

「え・・・・・？」

俺が驚いてクレアの顔を見るとクレアは言つた。

「圭太の願い、叶えてあげるわ

「本当に？！」

クレアの言葉に俺は嬉しくてクレアの小さな小さな手を握った。

「痛いってば。でも条件があるのよ」

俺がクレアの言葉に手の力をゆるめると

クレアは俺の手からパッと手を離した。

「条件？」

「ええ。そう一つだけ」

「舞が助かるなら何だつていいよー。」

クレアが俺の言葉に言いにくそうにこつこつ言つた。

「その舞ちゃんね、舞ちゃんは元気になるわ。病気の元を私が魔法で消すから。でもね。そういう大きな願い事には条件がつくのよ」

クレアはそこまで言つと俺の顔を見て続けた。

「いわゆる見返りつてやつよ。大きな願い事には付き物なの」

「なに？ 焦らしてないでハツキリ言つていいよ」

俺の言葉にクレアは少しだけ間をあけてこう言つた。

「圭太と舞ちゃんは離れ離れになる。一度と会えないかもしれない」

俺はゴクンと唾を飲んだ。

拳をグツと握つた。

クレアはそんな俺を見てこいつ言つた。

「・・・・・人の命を・・・・・運命を変えてしまうんだもの。魔法をかけるのは私だけどそれを望んだのは圭太よ。人の運命を変えた人間はその相手とは一緒にいられない」

俺は右手に光るペアリングを見つめた。

舞の笑顔が浮かぶ。

「・・・・・舞は本当に助かるんだよな？死ないよな？」

「ええ。それは保障するわ。でも」

俺はクレアの顔を見た。

クレアは続ける。

「舞ちゃんが元気になつてから、また会える保障はできない」

俺はクレアをじっと見つめてこいつ言つた。

「いいよ。舞が元気になるならそれでいい」

俺がそう言つとクレアは一ヶ口リ笑つていつ言つた。

「好きなのね」

「ああ。『じめん』

「謝らなくていいわ。私に言い寄つてくる妖精は結構いるんだから」

「どうか」

俺はそう言つて笑つた。

クレアも笑つた。

「さて。じゃあ圭太、あなたの願いを叶えるわ」

「お願いします」

俺がそう言つてクレアに頭を下げると。

クレアが小さな小さなステッキをくるくる回した。辺りが光に包まれた。

俺は眩しくて目を閉じた。

「舞ちゃん、すぐに元気になるわ」

耳の横でクレアの声がした。

「ありがとう！」

俺は大きな声でそう言つた。

「圭ちゃん！ 私、治つたの！ お医者さんは首を傾げてたけど、でも私の病気治つたの！」

元気になつた舞がぴょんぴょん飛び跳ねながら俺にそう言つた。

「良かつたな！」

俺はそう言つて舞に一ヶ口リ笑つた。

「うん！ ありがとう！ 圭ちゃんのおかげだよー。『え？！』

俺が驚いて舞を見ると舞は一ヶ口リ微笑んだ。

「舞、これから色々な所に行こうな。学校また一緒に行けるな」

俺がそう言つと舞の顔が突然曇つた。

「それはできないの・・・・約束なの・・・・。私、遠くへ行くの。でも安心して！私、そこで元気に暮してるから！」

一  
舞

## 俺は舞に近づいた

舞を抱きしめようとした瞬間

海に浮かぶ島の上に、うるさい足音が聞こえた。

F · · · · · | 114 也?

驚いて辺りを見回した

いつのまに・・・・・・・。

カーテンの隙間から太陽の光が差し込んでいる。

そばでベッドから飛び起きた

ソと携帯で田代を研語り

奄は驚いた

自分の目を疑つた。

た  
て

三國志傳

三國志傳

それともあの願い事を叶えたことで

三日後にタイムスリップでもしたんだろうか……。

だとしたら、なんでだ？

「母さん！俺、二日も寝てたの？」

一階のキッチンにいた母に聞いてみた。

母は驚いた顔でこう言った。

「あんた夜中に帰ってきたと思ったらそのまま風邪で寝てたじゃない。覚えてないの？」

母はそれだけ言つと洗い物を始めた。

俺、自力で家に帰ったのか？

あの島でクレアが願いを叶えてくれて、

光が眩しくて目を閉じて。

それで・・・・・。

ああ。

全く記憶がないや・・・・・。

覚えてるのは舞が元気になつた夢を見たこと。

「いや。夢じやない！」

俺はそう言つて家を飛び出した。

自転車にまたがる。

急いで病院へ向かつた。

途中で花屋に寄つていつもより豪華な花束を買つた。  
病院まで自転車をとばした。

急いで病院に入ると階段を一段飛ばしで駆け上がり  
舞の入院している病棟のドアを開ける。

舞の病室の前で深呼吸を3回して  
ドアをノックした。

返事がない。

「舞、入るよ」

俺はそう言つてドアを開けた。

「舞？」

俺はさつ言つて病室を見渡した。

部屋は空っぽだった。

ベッドは綺麗にシーツがかけられていてベッドの横のテーブルにも何もない。

まるで最初からそこに誰もいなかつたかのよつじ。

俺は胸がズキンとした。

体が震えた。

まさか。

舞は・・・・・。

とにかく。

ナースセンターで事情を聞こつ。

そう思い病室を出た。

その時だった。

「あら。圭太君」

後ろで聞き覚えのある声がした。

驚いて振り向くと。

舞と仲が良かつた看護士の鈴木さんが立つていた。

「あ、鈴木さん！ 舞は？！」

「それがね。スゴイのよ！」

鈴木さんはさつ言つて俺に話してくれた。

それは昨日の朝のことだった。

舞が突然、すごく体調がいいと言つていたらしい。

顔色も戻つっていた。

舞の担当医が舞を診断してから、その体の変化に気付き検査をした。

あらゆる検査をした結果。

舞の病気は跡形もなく消えていたそうだ。

「こんなことは初めてだ！」

担当医はものすごく驚いていたらしい。

舞は今日、元気に退院して行ったといつ。

「舞はいつ退院したんですか？」

「ついさっきよ。すれ違つたりしなかつたの？」

鈴木さんはそう言って俺の顔を見た。

俺は下を向いた。

変だな・・・・・。

ついさっき退院したのなら

どこかですれ違つてもいいはずなのに。

そして。

俺はクレアの言葉を思い出した。

「圭太と舞ちゃんは離れ離れになる。一度と会えないかもしない

離れ離れ・・・・・。

もうすでに俺と舞はどんどん離れて行つてるのか？

いや。

舞が元気になつたのならそれでいいじゃないか。

それに舞の家に行けば顔を見られるかもしれない。

鈴木さんにお礼を言うと。

俺は急いで病院を出た。

自転車をこいで家に向かつた。

必死に自転車をこいだ。

舞に会いたい。

せめて一目だけでいいから。  
会いたい。

舞の家の前まで来ると自転車を止めた。  
家の前の門には鍵がかかっていた。

インター ホンを押してみる。

誰も出ない。

もう一度インター ホンを押す。

やつぱり誰も出ない。

夕方になつても。

夜になつても。

舞の家には明かりが灯らなかつた。

インター ホンを押しても誰も出なかつた。

とほどほど家に帰ると俺を見た母がこう言つた。

「ポストに圭太宛の手紙が入つてたわよ。」

母がそう言つて俺に手紙を渡してきた。

宛名を見る。

「舞からだ！」

部屋に戻つて早速、舞からの手紙を読んでみた。

今日、私は退院することになったよ。  
病気、治つてたの。すごいよね。

お医者さんも奇跡だつて驚いてた。

私、すごく元気になつたんだよ。

だけど私はもう圭ちゃんの側にいられない。

お父さんの転勤先の外国へ着いて行くことにしたの。

ごめんね一緒に学校に行けなくて。

だけど私は元気だから心配しないで。

ありがとう。大好きだよ。

俺はその手紙を読み終わると、その場に座りこんだ。

舞からの手紙を手に持つたまま呆然としていた。

俺達はもう一度と会えない。

本当なんだ・・・・・。

クレアが嘘をついていたと思つていたわけではない。

どうせ大したことないだらうと思つてた。  
だけど・・・・・。

「母さん！ 舞のお父さんの転勤先って知ってる？」

俺がリビングへ行つてソファに座つてゐる母にそう聞くと  
母は首を傾げながらこう言つた。

「あ・・・・・。お母さんだつてお隣が転勤したこと今日初めて  
知つたんだもの」

会社から帰つてきた父を見ると。

父は俺を見て首を横に振つた。

俺は黙つたまま部屋に戻つてベッドに寝転がつた。  
舞が元気になつてくれたのは本当に嬉しい。

でも。

せめてもう一度だけ会いたかった。

だけど。それは我慢な願いだよな。

俺は舞が助かればそれでいいって思つてたじやないか。

「これで良かつたんだ・・・・・・」

俺はそう呟いて手紙をギュッと握つた。  
流れそうになつた涙をグッとこらえた。  
舞の笑顔が浮かんだ。

瞼に焼きついて離れない笑顔。

大好きな笑顔。

せめて。

せめて夢の中だけでも。  
君に会いたい。

(おわり)

(後書き)

「」で読んでくれてありがとうございました。

これも過去に書いた小説です。

「一度と会えない二人」というトーマで書きたいなあと迷つて、ついでこの展開になりました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0740m/>

---

願い事は一つだけ。

2010年10月8日14時38分発行